

兵庫県養父市ハチ高原におけるスキー観光地域の展開

—外的要因がもたらす変化への宿泊施設の対応—

治部憲良*・矢ヶ崎太洋**

*養父市産業環境部商工観光課, **兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科

日本の山村地域では、スキー場の開発をきっかけに各地に観光地域が成立した。一方で、スキーブームの盛衰は観光地域の多様化をもたらし、教育旅行や外国人を受け入れる地域が現れた。今日、教育旅行が見直されて、縮小を余儀なくされつつある。また、新型コロナウイルス感染症の流行も観光業に負の影響を与えた。本稿では、兵庫県養父市に位置し、教育旅行を数多く受け入れるハチ高原を事例に、その展開と外的要因によってもたらされた変化への宿泊施設の対応を検討した。ハチ高原は山岳スキーの場となり、集落部から観光業が発展したが、開発の進行に伴って、観光業の重心は高原部へ移行した。ハチ高原における宿泊施設は独自性が強く、外的要因に対する対応は多様なことが明らかになった。また、ハチ高原では、教育旅行の縮小や新型コロナウイルス感染症の流行の影響は限定的であった。

キーワード：スキー観光地域、外的要因への対応、教育旅行、ハチ高原、兵庫県養父市

I はじめに

日本の山村地域は高度経済成長期に農林業が衰退し、その代わりに外部資本が流入して工業や観光業が発展し、都市地域の周辺として都市経済に組み込まれた構造へ転換した（岡橋，2012）。その中でも、豪雪地帯の山村地域では、雪を観光資源とするスキー観光が導入され、観光業が地域の重要な産業となった。ただし、観光業は外的要因の影響を強く受けるので、観光地域の存続のための対応が重要な意味を持つ。本論文では、近畿地方において大規模なスキー観光地域であるハチ高原を取り上げ、その展開について検討するとともに、外的要因への対応について考察する。

1. 山村地域におけるスキー観光の成立と意義

日本のスキー観光地域の成立と発展については、呉羽（2017）が時期区分を行って整理しており、これを参考にスキー観光地域の展開を概観する。日本にスキー技術が導入されたのは、オーストリ

ア・ハンガリー帝国の軍人であるレルヒ少佐が、1911年頃に日本陸軍の軍人向けの講習会を実施したことがきっかけとされる。豪雪地帯ではスキー技術が徐々に伝播した。その後、各地の山村地域にスキー場が開発され、その中でも温泉と結びついた事例がみられた。当時の温泉地では冬季の積雪によって利用者が減少するため、それを補うためにスキー場が開発された（白坂，1986）。

第二次世界大戦後、連合軍進駐軍が1946年頃に北海道の藻岩山と長野県の志賀高原にスキーリフトを設置した。1948年には草津温泉のスキー場にスキーリフトが設置され、その後、日本各地にスキーリフトが普及した。1955年から1980年までに多数のスキー場が開発されたが、農家が家屋の一部を宿泊施設として改築した民宿が始まり、農業と冬季宿泊業を兼業する形態が成立した（石井，1992）。その一方で、1970年頃から一部の民宿地域において夏期営業が始まり、主に学校のスポーツ合宿を受け入れると同時に、グラウンドや体育館も整備された。また、洋風民宿であるペン